コンテナプラント・ランドスケープの将来

The Future of “Container-Plant” Landscapes

横張 真*
Makoto YOKOHARI

1. エッジ・シティとスラム — 郊外をめぐる2つの現実

アメリカ、アリゾナ州フェニックス。全米第7位の人口規模を誇る大都市と統計は伝える。しかし、はたしてこれを「大都市」と呼んでよいのだろうか。人が一般に大都市に期待するもの、それはたとえば林立する高層ビルであり、雑踏やバス・電車の往来が織りなす喧噪だろう。しかしフェニックスには、それらがほとんどない。あるのはただ、砂漠のただ中に見渡す限り続く、押しつぶされ飛び散ったような低密市街地の群れである。中心街らしきものがないわけではない。拡散した市街地が、全く一様というわけでもない。目を凝らせば、ショッピングモールやオフィスビル、工業団地などを中心に、各々の市街地がゆるやかに集塊している様がかろうじて見て取れる。だが、それらはおよそ核と呼べるようなものではなく、いわば単調に連続する市街地にわずかな区切りを与える読点にすぎない。

フェニックスに象徴される都市からなる現代アメリカを、Duany, et.al (2000) は“suburban nation”と表現した。しかし、これは果たして“suburb”なのだろうか。「郊外」にあたる語“suburb”は“usually residential region around a major city”と定義される。人口や施設の集積を伴った核としての都市の外縁にある、主に居住のための空間というわけである。この定義に従うならば、フェニックスの場合、核にあたる集積地が見あたらない以上、郊外も存在しないことになる。

フェニックスのような発展を遂げた北米の大都市の縁辺部を、Rowe (1991) は“middle landscape”と呼び、Garreau (1992) は“edge city エッジ・シティ”と名付けた。戦後の北米の大都市では、モータリゼーションに後押しされながら、まず1950～60年代に居住の場の郊外移転が起き、60～70年代に消費の場の郊外化が続き、80年代以降は就労の場までもが郊外へと移転した。この結果、すべての機能を失い空洞化した中核都市の周囲に、新たな「都市のようなもの」が衛星状に取り巻くようになった。Garreau はこれらをエッジ・シティと呼び、現代北米社

会の縮図であるとともに、新たなフロンティアでもあるとした。郊外をめぐる否定的な論調が多いなか、Garreau はきわめてオプティミスティックに郊外をとらえている。20世紀が、その是非はともかくも、アメリカ型資本主義経済が世界を席卷した時代とするならば、そうした豊かで強いアメリカが行き着いた究極の姿のひとつが、エッジ・シティというわけだ。

一方、アジアのメガシティを代表するフィリピンのマニラ首都圏の縁辺には、現代の郊外を象徴するもうひとつの現実が存在する。スラムである。都市農村間の所得格差の増大や急速な人口増加、さらには不安定な政治体制に裏打ちされ、マニラの人口は、とくに80年代以降、爆発的に増加した。社会基盤の整備速度をはるかに上回る人口増加は絶望的な貧困を生み、とくに郊外一帯にスクウォッターと呼ばれる不法占拠者の居住地を大量に発生させた (Ohmachi and Roman, 2002)。造成途上地、農地、河川敷、ゴミ処分場、果ては鉄道線路のなかにまで、スクウォッターの暮らす廃墟のような掘っ立て小屋が立錐の余地もなく建ち並ぶ様は、マニラの郊外を特徴づけるとともに、貧困、汚染、健康障害、犯罪といった、現代の都市社会がかかえる疾病を象徴する景観でもある。

北米のエッジ・シティが、アメリカ型資本主義経済の成功が行き着いた果てを象徴するとしたら、その一方の極にある、同経済が内包する矛盾の象徴が、アジアのメガシティにおけるスラムであろう。郊外は、あたかも鏡のように、その社会の有り様を忠実に描写する。

2. 日本の郊外

翻って、日本の郊外はどうか。1950年代末に始まった高度経済成長期、郊外は、3大都市圏を中心とした大都市への人口集中の受け皿として、急速に拡大していった。当時の日本住宅公団による大規模な住宅団地、いわゆる「団地」の建設は、そうした郊外を象徴する存在だった。しかし団地は、ただ低廉な賃貸住宅を早く大量に供給するため

*筑波大学社会工学系

だけの存在ではなかった。青木（2001）が指摘するように、団地は同時に、白物家電や応接セットに囲まれたアメリカ的な生活のショーケースとして、庶民のあこがれの的でもあった。たとえば、住宅公団による最も初期の団地のひとつに千葉県松戸市の常盤平団地があるが、昭和30年代半ばに建設・入居が始まったこの団地の当時の案内パンフレットをみると、そこでは、すばらしい環境のなかにガス・電気・下水道などのインフラや文化施設が完備していることが謳われている（青木，2001）。仮の宿としての郊外と、羨望の対象としての郊外。戦後の日本の郊外は、こうした相反する二面性をもちながら拡大の一途をたどってきた。

日本の郊外を特徴づけるもうひとつの現実には、市街地と農地が小規模に混在した、いわゆる農住混在空間の存在がある。市街地と農地の混在は、近年になって発生した現象というわけではない。古くは江戸や京の街にも農地と市街地の混在は認められていた（藤井他，2002）。江戸時代の儒学者であった荻生徂徠はその著「政談」のなかで、すでに当時の江戸の郊外における無秩序な市街化を批判している（田村，1992）。こうした、いわば伝統的とも言える混在を容認する風土に加え、都市部への急速な人口集中に促されながら、農住混在空間は日本の郊外を特徴づける空間として、急速に拡大していった。

これに対し、西欧に端を発する近代都市計画は、都市と農村は中世ヨーロッパの城郭都市のように一本の線で明確に区分けされ、それぞれの機能に特化することが双方にとって最も望ましいと教えてきた。都市計画法をはじめとした各種制度も、こうした発想をその根底に据えながら制定されてきた。しかし現実には、どこまでが都市でどこからが農村なのか分別不能な空間が、現代に至るまで存続し続けている。日本の郊外は、効果的な都市施策の不在を象徴する空間でもある。

3. まちの商品化と消費、廃棄

郊外の市街地をめぐるのは、都市インフラ整備や地域社会の形成上、多くの問題を孕むとの指摘が繰り返されてきた。なかでも近年の青少年による凶悪犯罪が、郊外に特有の現象として語られてきたことは、記憶に新しい（宮台，1997，越智，2000）。しかし、空間計画という立場からすれば、郊外をめぐる最も本質的な問題は、資本主義経済のもと、まちが「商品」として扱われたという事実にあるのではなかろうか。

アメリカ型資本主義経済の最大の特徴のひとつに、19世紀以降の工業技術の発展を背景とした、工業製品の大量生産・消費・廃棄がある（有賀，2002）。化石燃料や地下資源などの移転性資源に全面的に依存しながら、規格化された製品を早く安く大量に生産することで富を生む。古くはT型フォードに代表される、そうした近代工業のあり方

を基礎としたアメリカ型資本主義経済は、産業革命前の家内制手工業が引きずっていた伝統や地域性といった呪縛から解放放たれることで、20世紀の世界を律する共通原理になっていった（柏木，2002）。

都市は元来、その土地の伝統や自然環境を色濃く反映した、極めてローカルな存在であった。19世紀イギリスの都市における貧困や汚染への反省から、従来の都市でも農村でもない、全く新しいユートピアとして提唱されたハーワードの田園都市といえども、その空間概念は、ビクトリア王朝期におけるイギリスの植民都市の思想を継承していた（Home，1997）。19世紀末、アメリカ・フィラデルフィア郊外に誕生した北米で最も初期のベッドタウンのひとつ、チェスナットヒルでは、近在で産出する石材や樹木が住宅建材や並木に積極的に用いられた（Contosta，1992）。東京都日野市の多摩平団地では、その地がかつて御料林であった履歴を活かすべく、御料林当時からの並木が意図的に保存された（秋山，2000）。

しかし、ユニバーサルシティを旨とするアメリカ型資本主義経済は、工業という枠内にとどまることなく、次第に都市のあり方にまで浸透する結果となった。工業製品は消費され、耐用年数を過ぎれば廃棄される。本来、そうした概念から最も遠いところにあるはずの都市までもが、生産・消費・廃棄というサイクルの対象となったわけである。そうした郊外の端緒は、戦後、アメリカ東海岸に次々と建設されたレビットタウンに見ることができる（Matarrese，1997）。帰還兵を中心とした中産階級をマーケットに建設されたレビットタウンは、規格化されたプレハブ住宅が延々と建ち並ぶ、今となっては当たり前ともいえる郊外住宅地のさきがけであった。白地のキャンパスとしての土地に、工場で大量生産されたパネルが運び込まれ、規格どおりに組み立てることでまちができあがる。それはアメリカ型資本主義経済の文法そのままの郊外であり、エッジ・シティの出発点であった。

そして今日、エッジ・シティとされる北米のまちを訪れると、竣工直後の磨き立てられたようなショッピングモールやオフィスビルがある一方、くたびれ寂れた末に取り壊されつつあるニュータウンを随所で見かける。それらは多くの場合、建設後わずか2～30年程しか経過していない。まちが四半世紀のうちに消費・廃棄されているわけである。取り壊された後には新たなまちが造られる。しかしそれは、かつてそこにあったまちと場を同じくこそすれ、社会的な履歴をすべて断ち切った上で再生される。新しい商品である以上、かつてそこにあったまちの記憶は意図的に消されるのである。

地の文脈の否定とまちの商品化は、日本においても認められる。アメリカ的生活のショーケースとしての団地は、地の文脈を否定したからこそ成立した存在であった。その

後、次々と建設されてきた大小様々なニュータウンも、時代を追うごとに、ローカリティを意図的に排除する傾向を強めてきた。こうした傾向の最たる例のひとつが、千葉県千葉市の「あすみが丘」であろう。民間大手ディベロッパーが中心となって開発されたあすみが丘の最大の特徴は、街区が分譲価格帯によって明瞭に区分けされている点にある。ここでは、本来は伝統やローカリティと密接に関連するはずの「高級」という概念が「高価格・高品質」に置き換えられるなかで、貨幣価値だけを唯一の尺度としたヒエラルキーのもとに、まちづくりが行われてきた。あすみが丘は、伝統やローカリティをかなぐり捨て、経済を唯一絶対の価値観として邁進してきた戦後日本を象徴したまちといえる。

4. コンテナプラント・ランドスケープ

地の文脈を否定した、商品としての郊外。リセットボタンを押し続けるかのようにしてつくられる郊外では、当然、リセット前にあったその地の記憶もまた消去される。その結果、そうした郊外のアイデンティティは、空間概念にもとづく「場」ではなく、時を拠り所とした「状況」にしかないものとなる。郊外の過去は、その場と時を共有した人々の記憶の中だけにしか存在しない。

しかし郊外が、状況の連続としてのたゆたう存在だとしたら、そのランドスケープを我々はどうか捉え、計画したらよいのだろうか。Steiner (1991) は、ランドスケープとは自然や文化といった地の履歴の総合的かつ視覚的な表象であると定義する。その地のアイデンティティを最もオーセンティックに表現するのがランドスケープというわけだ。ところが郊外にあっては、そうした地の履歴が意図的に消去される。こうした事情をやや逆説的に理解するならば、郊外のランドスケープとは、まさにリセットが繰り返されるという履歴こそを表現したものということになる。

ランドスケープの重要な構成要素のひとつに、植物とくに樹木がある。樹木の場合、時は50年100年といったスパンで流れていく。樹木を中心とした植栽がそれなりの姿に成熟するには、最低でも3~40年の月日が必要だろう。だが、たとえば昭和30年代に建設された団地の建て替えが現在進行中であることからわかるように、商品としての郊外の寿命は、せいぜい4~50年である。樹木のタイムスパンと相容れるものではない。

こうしてみると郊外のランドスケープは、現実的にも比喩的にも、コンテナプラント（鉢植え）に象徴されるのではなかろうか。可搬性があり、簡単に設置・撤去できる。購入当初からそれなりに見栄えがするが、もとより寿命が短い。状況に応じて別種のものに代替できる。その地に根を張ることなく、撤去後はそこにあったことすら記憶されない。コンテナプラントがもつこうした特徴は、郊外という空間の特性と極めて近似する。郊外のランドスケープと

は、樹木をも含め、そこにあるすべてが地に根ざすことなく移ろうものであることを表出したランドスケープ、と言えるのではないだろうか。

5. パラダイム転換と郊外のランドスケープ

しかし今や21世紀、「環境の時代」である。生産・消費・廃棄を縮小することを是とする価値観が、社会を覆いつつある。地球レベルでの環境保全が人類共通の課題とされるなかで、資源の大量消費を前提とした享乐的なアメリカ型資本主義経済が終焉をむかえていることは、論を待たずもない。都市や郊外のあり方も、こうした時代と無縁ではあり得ない。外縁にむかって拡大の一途をたどってきた世界の各都市は、コンパクトシティを標榜しつつ都心回帰を図り始めている（海道、2001）。都市圏の拡大のなかで、まちを商品として消費し続けてきた郊外も、地域に賦存する資源や文化の有効活用を図ったまちづくりへと、抜本的な転換を図ろうとしている（都市・農業共生空間研究会、2002）。

こうした時代の趨勢は、郊外のランドスケープのあり方にも、当然、大きな転換をもたらす。土地の自然や履歴の復権は、郊外における時の流れをゆるやかにし、コンテナに植栽されることを余儀なくされてきた植物を、再び大地へともどす。ランドスケープは再び正当に、地の履歴の総合的かつ視覚的な表象となる。環境の時代はまた、ランドスケープの時代でもある。

しかし、ランドスケープからの発想は、果たして本当に時代を追い風とすることができるのだろうか。たとえば、郊外における「農」を考えてみよう。都市や郊外における「農」にかかわる営みは、今、先進国・発展途上国を問わず世界的に注目を集めている。産業としての農業に加え、先進国にあってはゴミの減量や安全・安心かつ新鮮な食料の供給、農作業を通じた療養（セラピー）などの効果が期待されている（Bryant and Johnston, 1992）。発展途上国では、とくに貧困層の栄養改善や自律した生活の糧としての役割が期待されている（吉田、2002）。都市気候の緩和や景観保全、都市生態系の保全など、環境保全上に果たす役割も大きい（横張、1995）。都市や郊外における「農」は、昔ながらの産業としての農業にとどまらず、環境や社会を健全に保つ上での様々な役割を果たす存在となりつつある。だが、こうした役割の多様化に対して、日本の「農」をめぐる各種制度の整備は、あまりに立ち後れている。農はあくまで産業であり、産業以外の側面は所詮は補強にすぎない。そうした風潮が、行政部局には未だに根強く残っている。

ランドスケープをめぐる議論も、こうしたステレオタイプに陥るなかで、硬直化してはいないだろうか。時代が追い風であるのをいいことに、事の本質を見ることなく、旧

態依然とした発想を温存してはいないだろうか。今、ランドスケープからの発想に問われているのは、懐古的な姿勢から脱却し、現在の郊外をできる限りフランクに見つめ直すことだろう。

6. 郊外二世の誕生 — 郊外ランドスケープの将来

いわゆる郊外住宅地が建設されるようになって40年余。急速な経済発展が終わりを告げ、都市の膨張が一段落した現在、従来の概念や価値観からすればやや異形ながらも、郊外にも一定の社会的安定が生まれ、成熟のきざしが見え始めている。そうした動きを後押しするものとしてとくに注目すべきは、郊外で生まれ育った世代が今、社会の中核をなす年齢に達し始めたという事実である。彼らは親世代のように故郷から上京し、仮の宿として郊外に住み始めたわけではない。郊外こそが彼らの生まれ故郷である。そうした彼らの目に映る郊外のランドスケープは、親世代のそれとは、ずいぶんと違ったものなのではなかろうか。

たとえば団地のランドスケープを目の当たりにしたとき、郊外一世はそこに、貧しかった生活や満員の通勤電車に毎朝揺られた苦き経験、あるいは右肩上がりの経済に自らの立身出世を重ねた古き良き夢を、想起するかもしれない。しかし郊外二世にとっては、団地のランドスケープは自らの立身出世とは無縁の存在だろう。団地から想起されるのは、近所の友だちと造成途上の空き地で遊んだ経験であり、狭いながらも物質的にはなにに不自由のなかった暮らしだろう。そうした郊外二世が今、社会の中核をなす年齢に達し、都心の借家住まいの時代を終え、庭付き一戸建てを求めて郊外へと回帰しつつある。

こうした状況のなかで、我々はそろそろ、使い古され手垢に汚れた価値観に決別し、郊外をニュートラルな視点からとらえる術をもつべきではなかろうか。写真家ホンマタカシは、彼の代表作「東京郊外 Tokyo Suburbia」において、東京の郊外の「今」を、一切の虚飾や価値観を拒否しながら写実的に表現しようとした。コンベンショナルな価値観にとらわれない、対象をストレートに見つめた視線のなかに浮かび上がる郊外。郊外ランドスケープの将来は、そうした郊外像を見据えることから展望されるのではなかろうか。

引用文献

- 1) 秋山 寛 (2000): 住宅団地建替と緑のレストレーション—多摩平団地を事例として: CLA ジャーナル 149, 18-21
- 2) 青木俊也 (2001): 再現・昭和30年代 団地2DKの暮らし: 河出書房新社, 143 pp.
- 3) 有賀夏紀 (2002): アメリカの20世紀(上): 中公新書, 234 pp.
- 4) Bryant, C.R. and Johnston, T.R.R. (1992) Agriculture in the City's Countryside. University of Toronto Press,

Toronto, 233 pp.

- 5) Contosta, D.R. (1992) Suburb in the City: Chestnut Hill, Philadelphia. Ohio State University Press, Columbus, 353 pp.
- 6) Duany, A., et.al. (2000) Suburban Nation: The Rise of Sprawl and the Decline of the American Dream, North Point Press, New York, 290 pp.
- 7) 藤井美波・横張 真・渡辺貴史 (2002): 江戸時代末期の江戸における農地の分布形態の解明: 都市計画論文集 37, 931-936
- 8) Garreau, J. (1992) Edge City: Life on the New Frontier. Anchor Books, New York, 548 pp.
- 9) Home, R. (1997) Of Planting and Planning. E & FN Spon, London, 249 pp.
- 10) 海道清信 (2001): コンパクトシティー持続可能な社会の都市像を求めて: 学芸出版社, 287 pp.
- 11) 柏木 博 (2002): モダンデザイン批判: 岩波書店, 260 pp.
- 12) Matarrese, L. (1997) The History of Levittown, New York, The Levittown Historical Society, 61 pp.
- 13) 宮台真司 (1997): まぼろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方: 朝日新聞社, 285 pp.
- 14) 越智道雄 (2000): 幻想の郊外—反都市論: 青土社, 268 pp.
- 15) Ohmachi, T. and Roman, E.R. (2002) Metro Manila: In Search of a Sustainable Future. University of the Philippines Press, Manila, 388 pp.
- 16) Rowe, P.G. Making a Middle Landscape. The MIT Press, Cambridge, 325 pp.
- 17) Steiner, F. (1991) The Living Landscape. McGraw-Hill, New York, 356 pp.
- 18) 田村 明 (1992): 江戸東京まちづくり物語: 時事通信社, 487 pp.
- 19) 都市・農業共生空間研究会編 (2002): これからの国土・定住地域圏づくり: 鹿島出版会, 242 pp.
- 20) 横張 真 (1995): 農林地の環境保全機能に関する研究: 日本造園学会誌 59(2), 101-108

(2003.1.11 受付, 2003.3.1 受理)

Summary: Urban fringe landscapes can metaphorically be called a mirror that clearly reflects the character of society. Urban fringe landscapes of American cities, commonly known as edge cities, clearly represent the success in American capitalism which dominated the world in the 20th century, while slums in the fringe of Asian cities have been the symbol of conflicts brought on by capitalism.

What characterizes modern urban fringe landscapes is the fact that lands have also been regarded as commodities which can be mass-produced, consumed and wasted, without having any relationship to vernacular bio-physical and social characteristics of the area. Urban fringe landscapes can therefore be named as "container-plant landscapes", which can easily be produced, consumed or replaced by other landscapes. However, with the rapidly growing concerns on the environment, urban fringe landscapes in the 21st century should be restored so as to realize a green, sustainable, and compact city. Vernacularity in terms of bio-physical and social characteristics should be carefully examined and reflected in the planning of urban fringe landscapes.